朱を奪ふもの

朱奪ふもの

圓地文子

新潮社版

朱を奪ふもの

昭和三十五年五月二十日　發行
昭和三十五年八月　五　日　三刷

定價　貳百六拾圓

著　者　©　圓　地　文　子

發行者　佐　藤　亮　一
東京都新宿區矢來町七十一

本文印刷　二光印刷株式會社

製　本　東京牛込加藤製本

發行所　株式會社　新　潮　社
東京都新宿區矢來町七十一
電話東京三四一局代表七一一一～九
振　替　東　京　八　〇　八　番

亂丁本はお取換へいたします。

目次

第一章　朱（あけ）を奪ふもの　五
第二章　わが戀の色　四三
第三章　二つの劇場で　八一
第四章　女の道化　一二七
第五章　續女の道化　一五五

装題
畫字

森川

田端

正康

治成

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

朱(あけ)を奪ふもの

第一章　朱(あけ)を奪ふもの

宗像滋子は齒科大學の拔齒室の椅子にがつくり頭を倒してぼんやりしてゐた。口の中には一ぱいガーゼがつまつてゐる。今しがた拔きとられた齒から左側の上脣一帶が注射藥にしびれてゴム鞠のやうにふくらんで感じられた。

「さあ、これで全部拔けました、もう齒痛で苦しむ思ひは一生ありませんよ」

柔和な笑顏のS教授は滋子の肩を輕く敲いて、しばらく靜かにしてゐるやうに言捨てて去つて行つた。

S教授の言葉にはうなづいて見せたが、口の中にもう自分の齒が一本もないのだと滋子が實感したのはそれから可成り經つたあとだつた。細い注射針を何本も突き刺されて痲痺してゐる齒齦から齒を引拔く間、感じられる痛みは殆どなかつたが、拔齒器にしつかり挾まれた根の深い齒が無慈悲な力でめりめりと肉から離れてゆく瞬間には、他の感覺が全部生きてゐるだけ

に、もしそこが痲痺してゐなかつたらどれほどの苦痛に七顚八倒するであらうと想像するだけで身體中が縮み、氣死の狀態に陷ちこんでしまつた。口の中ががらん洞になつた、龜の子の口のやうになつたと氣づくとあつと聲を立てさうになつた。長年齲齒や齒槽膿漏に苦しめられて來た齒の最後の始末がついて、ほつとするよりも大切なものを盜まれたやうな喪失の思ひが强いのである。

滋子はそつと身體を起して眼の前の臺の上の銀色の盆を見た。そこにはや鉤や鑿や釘拔きに似た拔齒器具や注射器と一緒に、今滋子の口から拔き取つたばかりの四五本の齒が行儀よく置並べられてゐた。大抵先きは朽ちてゐたがどれも根が茶つぽく汚れて煙草染みた象牙のパイプの色であつた。中に一本細い牙のやうに根が弓なりに曲つて三センチ近くもある齒があつた。滋子はその齒をおそるおそる指さきにつまみとつて眼に近くよせて見た。この齒は左の前齒から三本目にあつてもう二三年來拔けさうでぬけず、川水に搖られる杙のやうに舌のさきで動かすとぐらりぐらり動いてゐた。もう拔けるだらう、ぬけるだらうと、つい今朝まで舌のさきで癖のやうに動かしつづけてゐたのに、今ぬきとつて見るとこの根はこんなに深く肉に食入つて、二センチ近くも埋つてゐたのである。滋子はその齒の肌をそつと觸つてみて眼に觸れる部分の滑らかな硬さと肉にくひ込んでゐた茶色い細い部分のざらざら粗らい手當りにこの齒の自分の底から生え出、育ち、生き耐へて來た長い年月を思つた。ものを嚙む力の失はれたこの齒を滋

子は荷厄介にして早く拔けろ拔けろといぢり散らして來たが、齒の肉に食ひ込んだ生命は思ひの外に根深いのであつた。磨滅した一本の齒に滋子はやるせない悔と愛着を感じた。自分の肉體と離れてしまつた齒は、もうどんなに足擦りしても自分のものにはならない。自分の生命の一部の死んだのを正しくわが眼で見てゐるのである。齒はそのまま自分の骨に見えた。

三度目なのだとふと滋子は思つて荒寥とした。自分の眼で見たわけではなかつたが、前に二度滋子は身體をメスで切り裂かれ蝕んだオーガンを抉り出されてゐた。一度は右の乳を結核菌に冒されたため、もう一度は女だけの疾む癌であつた。手術を受けた二度とも性器の病氣なのが滋子には何かの呪咀のやうに氣味惡く思はれた。乳を切つた時はそれほどにも思はなかつたが、二度目の手術を受けたあとでは、女の性質を失つて行くのではないか、さういふ性の喪失がやがて生きる力をさへ失はせるのではないかと不安に苛まれることが多かつた。その時に滋子を力づけたのは何とも奇矯な聯想であつたが、司馬遷が「史記」を書いたことであつた。司馬遷は政治に志を持つてゐたがそのために事に坐して宮刑を受けた。「史記」は司馬遷のさうした肉體の變化の後に描かれた非情な人間の歴史である。司馬遷は人間に對して酷薄にならざるを得なかつたが、彼の冷酷に書きぬいた人間の歴史は、司馬遷の非情を越えて生々しい血や肉のうごめきを數千年を隔てた現在にも感じさせる力をもつてゐる。司馬遷は失はれた性の執着を全部史記の中に注ぎ入れたのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こんな風に女性の機能を失つたことが生な悲哀や足擦りにならず、すぐ何千年も前の中國の歴史家への共感に滑べつこく結びついてゆく自分の思索自體の奇妙さを滋子は滑稽に感じた。これも滋子の中にどつかり据わつて動かない化物の仕業であつた。化物は滋子の中に底深く隠されてゐて、土龍のやうに陽の眼を見ない。どこから來たのかもはつきり解らないが、滋子の生命の消え去る日までは滋子の肉體の底にもそもそ土をもたげつづけ、滋子の精神に穴を穿ちつづけるであらう。

滋子の身體に乳が一つしかないことも、子宮ががらん洞になつてゐることも話さなければ誰れも知りはしない。恐らく龜の子のやうに舌と脣の吸ひつき合ふ今の齒なしの狀態が數日後に義齒でごまかされれば、人は一向注意しなくなる……それ以上に着物の下の祕密は誰れにも氣づかれはしない。顏に痣一つ、切傷一つあつても他人は眼をそばたてるけれども、隠された部分の片輪は一向氣づかれずそのまま何げなく人生が流れてゆくのだ。こんな片輪がどうにも騙せないのは戀愛の起つた場合だけであらう。滋子は女性の機能を失つて後も幾度か男に戀した、戀をすると心にひどく脆いところが出來て恰度薄皮の出來たばかりの新しい傷に風や寒さが滲み透るやうな痛み易い氣持になるのが若いときからの癖であつたが、そのフィーブルな心の狀態を味ふ度に滋子は自分の肉體は毀されてゐても情緒には性が生きてゐるのを頼もしく思つた。しかしそれはそれだけのことで滋子はあの病氣以來自分の身體を爆藥のやうに怖れてゐ

たし、生命への恐怖を凌ぐほど強い情熱の虜になつたこともなかつた。

もつとも滋子は丈夫でゐたころでさへ情熱の不足した女だつた。生命全體が焰になつて燃え上る瞬間を滋子は曾つて經驗したことがない。抒情として男を戀する思ひは烈しくもあり、綿綿と絶えぬ愛執でもあつたが、それは結局あの「かげろふの日記」を書いた王朝貴婦人作家の末裔を自覺させる燃え切らない自我のナルシス風な展開だつたのである。抒情を愛情と見あやまつて安心してゐられた間割に幸福だつた滋子は、抒情が一種の自慰作用だと自分の心をふき分けるやうになつてから一層孤獨になりそれが本來の自分の是非ない姿に食ひしめられるやうにもなつた。

西洋映畫をみてゐると「あなたを愛す」「お前を愛す」愛す、愛す、愛すといふ言葉がふんだんに出て來て男と女が脣を合せたり、力をこめて抱きあつたりする。そんな時女は大抵嬉々としてゐるが、男の顏には暗鬱な苦澁が滲んでゐる。男の性に負はされた荷物が翳らす陰影なのだ。滋子はスクリーンの上でさういふ男の顏を見る度に、性の加害者のやうにばかり見られる男が可哀さうで堪らなくなる。さうして男の與へられた荷を理解することの出來なかつた自分の過去に悔を感じるのだ。

ふりかへつて見れば、滋子はもの心ついたころから生(なま)の人間を見失つてゐた。生きた人間の生活にあるものよりも、遙かに貪婪なめざましい世界を無自覺の中に外から與へられてしまつ

たのだ。それが幸福とか不幸とかの定義にははまらないまでも、一見平凡に見える滋子の肉體と精神をアブノーマルに變形させたことは否めない。つまり彼女の中に土龍のやうに住んでゐる化物の正體である。女性の性を半ば以上肉體から奪はれた滋子は、今もう一度少女時代から口の中に生えかたまつて、一緒に生きてきた齒をぬき去つてしまつた。その三つの死を思ふと滋子は自分に與へられた生命の歴史の不思議さについて、何とも語りたくてたまらなくなる。滋子は口の中にガーゼの猿轡をされたまま遙かな記憶へ自分を誘つて行つた。

滋子の記憶の最初のページに浮んで來るのは古風な武者窓のついた黑い長屋門とその門の前の廣いだらだら坂の上に赤く塗つた丸いポストがぽつんと立つてゐる風景である。坂はいつも人氣なく白つぽく乾いてゐる。坂の上は廣い通りを越えて靖國神社の境内になつてゐたから、恐らく小さい滋子は女中の背に負はれたり祖母に手をひかれたりして始終その坂を上り降りしてゐたに違ひない。ひよつこや鶯の形の彩色した飴を賣る飴屋やヴァイオリンを抱へた艶歌師もその坂の印象と一緒によみがへつて來るが、その勾配のゆるい白つぽい坂道は不思議に滋子の思ひ出の中の一番靜かな心の憩まる場所なのである。六つまで育つたその山ノ手の家の庭の樣子や家の造りは殆ど覺えてゐないのに、庭の隅にあつた四角い自然石の空井戸と、その上に蔽ひかぶさつてゐた石榴の樹の小さい照りのよい葉群の間の新しい傷口のやうに笑みわれた實

の淡紅に光る粒……又井戸の深い底に散りたまつて、風に鳴る枯葉の乾いた音、……さういふ斷片的な印象は長い年月の堆い塵の底に今も鮮明に殘つてゐる。

靖國神社のことを祖母や父は招魂社と呼んでゐた。日露戰爭からまだ十年とたたないころのことで初夏と秋の祭禮の時になると、靑銅の大鳥居のあたりから境內の兩側は見世物小屋で一ぱいになつた。內へ入ることは殆どしなかつたが、祭の時といへば滋子は祖母に連れられてそのひろい境內を埋めてゐる見世物小屋の前をぶらぶら歩いた。どぎつい泥繪具でけばけばしく塗りたてた看板繪には、白い細布のやうにくねくねうねつた首のさきに島田髷の娘の顏が笑つてゐ、胴は三味線を抱いてゐるろくろ首や、身體に金色の鱗の生えた人魚の髮のふり亂れたのや、いくつもの蛇を身體に卷きつけてゐる蛇使ひの女の繪などが描いてあつて、その下で異樣につぶれた聲の客引きが拍子木を敲き敲き因果物の口上を述べたててゐた。いくつもの繪がかたんかたんと變つておしまひに小さい畫面一帶が口の耳まで裂けた猫の顏になる化猫ののぞき機械(からくり)もあつた。

小さい滋子はごま鹽の髮を盆の窪の上で綺麗に切揃へて髮止めではさんでゐる、しやんとした身體つきの祖母を見上げてはそれらの異樣な看板繪の內容についてきいた。

「皆嘘なんだよ、ろくろつ首といふのはね、うしろに黑い幕があつて下に一人三味線を彈いてゐると首がによろによろのびて上の方で頭の方が笑つて見せるんだけれど、よく見てるとその

伸びる首のところが造りもので、上の顔と下の胴とは別々の人間なんだよ。首が上の方へゆくに從つて黑幕の中から顔だけ出して梯子を上つて行くんだろ……人魚だつて同じやうなものさ。見てゐる方も騙されてるのがわかつてて面白がつてるんだから……妙なものだよ」

祖母は江戸ッ子らしい男つぽい口のきき方で滋子の手をひいて强い足さばきで歩きながら言つた。しかし滋子の子供の頭は祖母の解說するほど、人魚やろくろ首の非現實性を認めてはゐなかつた。何故と言へば、母親のない滋子は毎朝眼がさめると隣の祖母の床の中へもぐり込んで祖母からさまざまな話をきくのを樂しんでゐたからだ。祖母の話は江戸時代の稗史小說や芝居の筋が多かつたが、それと同じくらゐに滋子を昂奮させたり恐怖させたりしたのは、祖母の若いころ育つた江戸の町に市民の間でまざまざと語られてゐた怪談であつた。本所や番町の七不思議の話、實際に誰れかが見たといふ狸や狐の化けた話、それらを話し上手の祖母は役者のやうに手ぶり身ぶりを入れて面白をかしく話してくれた。祖母は昔話をきくことに熱心な滋子を可愛がつて、民話の原則に違はず幼兒に前代の物語を傳承してゐるのであつたが、それらの話自身ろくろ首や人魚の見世物と緣のないものでないことを老人はまるで氣づいてゐないのであつた。

祖母の話の一つに足洗ひ屋敷といふのがあつた。本所の七不思議の一つだつた。その武家屋敷では夜中に天井から大きな毛むくぢやらの足がぬつと下つて來るといふのである。その屋敷

の中で一番美しい腰元がぬるま湯を沸かしておいて、その足をそつと洗つてやる……足はぬらぬらしてゐてなかなか綺麗にならないのだが、幾度も洗つてよく拭いてやらないとおとなしく天井へ歸つて行かず暴れまはるので、その腰元は怖さを堪へて、綺麗になるまで叮嚀に足を洗つてやるといふのだ。男の毛むくぢやらな足のぬらぬらしてゐるのをそつと洗つてやる美しい腰元はさぞ怖くて身も世もないであらうと想像するだけで、滋子はすくんで眼を瞠り、しかしさういふ怖い話をきく度に足を洗つてやる腰元の頸の白さや慄へる手のおびえた美しさは普通の美しさ以上に滋子を強く捕へるのであつた。

滋子の父の藤木志朗はS大の英文學科の教授であつたが英文學者としてよりも新しい演劇の指導者としての方が遙かに著名でもあり優れてもゐた。藤木は四十餘年の短い生涯を新劇運動に挺身して終つたが、新劇ばかりでなく、古い歌舞伎の復活や改作にも創意に滿ちた業績を遺してゐる。藤木のさういふ古典劇に對する愛情は主に母のたねから承けたもので、江戸の侍の家に生れて漢學と踊りと三味線を同時に稽古したといふたねは長い未亡人生活の間に二人の男の子を育て上げ、半ば中性化して生きて來たが、彼女を息子達の嫁に對して姑根性にさせなかつたのは、それらの素養が常にたねの心を現實以外の世界へ誘つてゐたためだつたかも知れない。最初の妻に死なれてあと、ずつと獨身を通してゐる滋子の父のためにたねは長男の裁判官

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com